

【文学研究科】

修士課程 第Ⅱ期 試験問題 ➡ 筆記試験を実施する選抜区分の出願者0名のため、公表していません。
博士（後期）課程 試験問題 ➡ 筆記試験を実施する選抜区分の出願者0名のため、公表していません。

令和7年度 大学院文学研究科修士課程 第I期試験問題

環境文化 I

問1 次の用語の中から3つを選択し、その番号を文頭に記入したうえで、150字程度で説明しなさい。

1. まればと、2. ハレとケ、3. ヴァナキュラー、4. 精進潔斎、5. 御旅所、6. 奴振り（奴行列）、7. 方言周圏説、8. フォークロリズム、9. オステンション

問2 フィールドワークの手法の一つに参与観察法がある。自分自身の体験に即しながら、その特徴を論じなさい（500字程度）。

環境文化 2

問1 次の用語の中から3つを選択し、その番号を文頭に記入したうえで、150字程度で説明しなさい。

1. 総合的有害生物管理 (IPM)、2. 予防保存、3. 慣らし、4. 国際博物館会議 (ICOM) による博物館の新定義、5. エコミュージアム、6. オーラルヒストリー、7. 文化の客体化、8. 文化財保護法における文化財 (6分類)、9. 佐渡島の金山

問2 北海道における民俗芸能の特徴について論じなさい (500字程度)。

大学院入学者選抜の解答例と出題意図

環境文化 1

問1

1. まれびと

折口信夫が提唱した概念で、日本の古代信仰や文化を理解する上で重要な用語である。異界（常世）から定期的に訪れる霊的または神的存在を指す。常世には悪霊から自分たちを守ってくれる祖先が住んでいると考えられた。本来は神であり、海の彼方の世界から来訪する存在として説明されたが、外部から来訪する旅人達も「まれびと」として扱われた。

2. ハレとケ

人々は意識的に時間を区切って生活している。ハレは儀礼や祭、年中行事や旅行などの特別な時間である「非日常」に、ケ（褻）は授業や仕事といった普段の生活である「日常」に分類される。また、非日常は聖に、日常は俗にそれぞれ対応する。ケのエネルギーの枯渇状態を祭りなどのハレの催事を通じて回復するという循環が指摘されている。

3. ヴァナキュラー

狭義には正統的な言語とは対照的な特定地域や社会で使われる俗語を指すが、民俗学の研究対象となる「俗」の領域をも表す用語である。「中心」「主流」「普遍」的な立場からは離れ、啓蒙主義的価値観からは存在場所を与えられていないような、その土地の生活様式に深く関連した慣習であり、民俗学はそうした対象に配慮しながら思考する特徴がある。

4. 精進潔斎

宗教的儀式の前に、肉食を避けて心身を清め、穢れを断つ伝統的な習慣で神道系の基本的な考えと実践である。祭りは、精進潔斎・お迎えの儀礼・直会・宴会という4つから成り立っている。神をお迎えする前に身を清めることが、精進潔斎であり、一定期間中日常の生業から離れて家族と別居しながら忌火をし、谷川のせせらぎで禊を済ませることもある。

5. 御旅所

祭礼で神輿が本社から出て氏子圏を巡行する際に、神がしばし滞在する場所で、御仮屋ともいう。神は祭りのたびに来臨し、終わると元の場所に戻ると考えられた。神社建築の発展で常住できる場所が設けられる以前の古い形式をとどめている。御旅所となる場所は、神社や祭神に深く関連する場所、氏子にとって文化的・歴史的に重要な場所であることが多い。

6. 奴振り（奴行列）

近世の大名行列に由来する風流系民俗芸能の一種で、挟箱、立傘、台笠、毛槍などを所持す

る武士の従者である奴が毛槍を振り回すなど独特の動きを大衆に披露する。歌舞伎舞踊の奴踊や、各地の祭礼行列に影響を与え、現在でも、全国各地の祭礼行列で見ることができる。北海道内でも道南・日本海沿岸部からオホーツク海沿岸部にかけて分布している。

7. 方言圏説

柳田国男が『蝸牛考』で提唱した考えで、古語は中心部よりも辺境に残ることを旨とする。蝸牛を表わす語が、京都付近で生まれてから、同心円状に拡散していき、最も外側に分布する語が最古層を形成し、内側に移動するにつれ、新しい語の分布となっていく。方言分布を観察すれば、新旧の語彙の拡散の仕方を推定できることを実証した。

8. フォークロリズム

直訳すれば、一見フォークロアのように見えるものである。民俗文化が本来の文脈を離れて見いだされる現象で、民俗文化の商品化や政治的な利用はもとより、町おこしのイベントにみられる疑似的な民俗の創出もフォークロリズムである。民俗学の知識が民俗文化を保持する人々に取り入れられたり自覚させられたりする現象も含まれる。

9. オステンション

映画、アニメ、ゲームなどに描かれた架空の催しが、現実世界で実際の活動として再現されたもの。ファンが作品に登場した実際の場所を探訪する「聖地巡礼」とどまらず、現実世界でフィクションを模倣する行為である。メディアによって広く流通・消費される大衆文化に対して、人々が実際に行動に移して、さらに内容を加味することなども含まれる。

問2

参与観察法は、人類学や民俗学などの研究分野で広く用いられる基本的な質的調査方の一つである。研究者が単に外部の観察者としてではなく、研究対象の集団の合意をとって積極的に参入する前提がある。この参加により、活動や行事等に入り込み、観察する対象と同じ視点や立場からデータを収集することが可能になる。調査者が対象の集団に参加することにより、人工的な設定での観察よりも自然で実際的なデータを入手できる。たとえば自治会の夏祭りを調査しようとする場合に、自治会の会員であれば、その企画の段階から内部の参加者として関与しやすく、対象者が通常行う行動や文化的な習慣をより忠実に観察できるというメリットがある。一方で長期間の現地滞在が求められるために時間的・経済的な負担が大きく、調査対象が限られ、代表性や一般化には向いていないなどの問題点がある。さらに対象集団に深くかかわることで主観的になりやすく、彼らへの配慮から、成果のとりまとめにもバイアスがかかるなどのデメリットもある。

※出題意図と入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)との関わり

大学院文学研究科では、日本文化について、とくに4つの分野から歴史的背景を踏まえて明日の豊かな文化創造を主体的に担いうる人間の養成を目指している。試験問題の作成に当たっては、本研究科が求める「大学院生像」にふさわしい入学者、すなわち本研究科で学ぶことに耐える学力・知力が充実しており、新しい学問の地平を切り拓き、自己の確立を目指すことのできる人を選抜することを目標としている。

問 1

1. 総合的有害生物管理 (IPM)

博物館の燻蒸薬剤として広く使用されてきた臭化メチルがオゾン層の破壊物質として使用不可になったことをきっかけに、薬剤に依存しない文化財の虫菌害対策として新たに策定された管理手法である。回避、遮断、発見、対処、復帰の5段階から成る。日常の予防システムの確立など、日常的な危機管理対応が特徴となっている。

2. 予防保存

現代の博物館における資料保存の分野で、かつて一般的であった修理保存から予防保存への流れが主流になってきている。文化財を劣化させる種々の要因による被害を事前に予測し、問題が生じてから対処するのではなく、問題を予測し、深刻な被害を未然に防ぐことが、博物館資料にとって負担や改変を減少させることにつながる。

3. 慣らし

借用や収集などで、外部から資料をミュージアムに搬入するとき、室内が素材に対して適切な湿度・温度であっても、すぐに開梱してはならない。持ち込まれた資料がそれまで置かれていた環境下における資料状態との落差を和らげるためである。梱包材を解かず徐々に新たな環境に慣らしていくことを「慣らし」または「シーズニング」という。

4. 国際博物館会議 (ICOM) による博物館の新定義

2022年のプラハ大会で採択された。誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育むことや、倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供するという内容が付加された。利用者や地域社会との相互関係を意識している。

5. エコミュージアム

地域と生活文化をそのまま展示できる博物館として、1960年代のフランスで提唱され、その後世界各地に波及した。古民家等の文化資源の保存活用が主であったが、地域振興や観光振興にもつなげている。住民が主役になり、新たな設備が不要で野外を取り込めるという利点もあるが、学術的な裏付けが弱く、レファレンス性が軽視されるなどの課題がある。

6. オーラルヒストリー

口述の歴史や語りを記録・保管し、記憶を歴史にして後世に残す営みを指す。語り手もっている体験・記憶を、聞き手とのやり取りを通じて掘り下げて文字化した歴史史料であ

る。公的な地位にあったものの記憶を取り扱う場合と、歴史として残りにくいマイノリティや女性などを対象とするものに二分される。

7. 文化の客体化

文化の客体化とは、他者に提示できる要素を選択しつつ、文化を操作できる対象として新たにつくり上げることであるが、伝統的とみなされてきた文化要素も、新たな文脈のなかで解釈し直される。観光の場を、ホストが真正な伝統文化を鑑賞したいなどのゲストやツアーリストの欲望やニーズを満たすための舞台ととらえることがそれに相当する。

8. 文化財保護法における文化財（6分類）

文化財とは人間の文化的な活動によって生み出された有形・無形の文化的所産を指す。文化財保護法で保護対象となっているものは、以下の6種に区分される。有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物（遺跡など）、文化的景観（当該地域の生活や風土により形成された景観地など）、伝統的建造物群（歴史的風致を形成している伝統的な建築物など）

9. 佐渡島の金山

佐渡は近世に鉱山開発が本格化した。鎖国政策下でも、高度な手工業による採鉱・製錬技術を250年以上にわたり維持し、世界有数の金鉱山として高品質の金を大量に生産することができた。現地ではこれらの鉱山や集落遺跡が良好に保存されており、貴重な文化遺産となっている。こうした歴史的価値が認められ、2024年に世界文化遺産に登録された。

問2

北海道における民俗芸能は、アイヌ民族の伝統的な儀式や芸能、日本本土から移住してきた人々の文化が同じ地域に共存しており、地域の自然や生活と深く結びついている。北海道の民俗芸能は、地域ごとの文化的・社会的な背景に基づく独自性を反映しており、これらが現在でも地域を特徴づけるユニークな文化として大切に守られている場合がある。アイヌの芸能は、神々とのつながりや自然との対話を重視し、儀式や祭りを通じて行われる。イオマンテ（熊送りの儀式）やカムイノミ（神への祈りの儀式）時に披露されるいわゆる「アイヌ古式舞踊」が代表的である。北海道の開拓が進む中で、日本本土からの移住者による民俗芸能も道内に広く導入された。これには、農耕社会における収穫祭や、地域ごとの伝統的な舞踊や音楽が含まれ、今でも何らかの形で源流地との交流が継続する場合も少なくない。とくに、民謡や盆踊り、囃子（音楽と踊りの演技を伴う）のような形態が見られ、これらは様々な地域で行われる祭りや集いで重要な役割を果たしている。厚岸では、南部からの漁師によって実演されていたものをアイヌが受け継ぎ、演目にアイヌの伝統的な踊り等を取り入れた神楽「厚岸神楽」も存在し、異なる文化同士のユニークな融合の実態も認められる。

※出題意図と入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)との関わり

大学院文学研究科では、日本文化について、とくに4つの分野から歴史的背景を踏まえて明日の豊かな文化創造を主体的に担いうる人間の養成を目指している。試験問題の作成に当たっては、本研究科が求める「大学院生像」にふさわしい入学者、すなわち本研究科で学ぶことに耐える学力・知力が充実しており、新しい学問の地平を切り拓き、自己の確立を目指すことのできる人を選抜することを目標としている。